

玄洋社関係史料の紹介

石瀧 豊美

第 23 回

福岡表警聞懐旧談 (一五)

福岡城の官軍を攻撃して失敗した福岡士族は、野芥周辺で官軍に抵抗したが、やがて三瀬峠へ向かう。そこで佐賀士族から通行を拒否され、山越えて田代へと抜けた(前号まで)。ここで二隊に分かれ、前隊は四三島(筑紫野市)の岡部家に立ち寄り接待を受ける。ここから、筑紫野市と小郡市の境目の一帯、乙隈近辺で官軍と遭遇。激しい戦闘で多数の死者を出して壊滅する。一方、越知彦四郎率いる後隊は遠くに銃声聞き、前隊の壊滅を悟りながら進行し、秋月城へと入る。この途上、官軍の弾薬輸送隊を捕虜にする。

明治丁丑

福岡表警聞懐旧談 下

清漣野生編述

第十一回

○馬市の激戦。前鋒隊全く潰敗す
斯くて、翌四月一日の未

の内、馬市通り、針摺峠を指して進行しか、りしが、こはそもいかに、筑後国乙隈村・横隈村の地方より、無数の官兵、隠見出沒。前後を圍繞しつ、八方よりの乱撃は開始せられ、彈丸雨注。修羅の巷に陥りたり。

此方に於ても、屹度戦線を立直し、一時散兵して、その方位に向ひて対戦勇闘。激戦数刻に渉り、果ては弾薬も竭き、各自抜刀、呐喊進入、死物狂となりて攻戦ふ。その進撃の下、小隊長舌間慎吾、大島太七郎、

月成元雄、江上直、村上彦十等は決死隊と共に敵軍に闖入し、味方一人、相手十人、苦戦激闘、その乱軍の間に、小隊長舌間、大島月成、江上を初めとし、隊士黒田平六、江上清、母里良度、泊伴次郎、田中伝、力丸豪雄、中村虎吉、吉川侃、吉田隼太、中村□太郎、水野吉次郎、水野乙吉、水野巴太、吉安謙吾、吉井勝馬、安村惣十郎、服部正巳、力丸嘉一郎、樋口三一郎、木村徹七、野間温次郎、高村茂三、佐野田太、佐野佐

十郎等を始めとして、即ち隊長五名、隊士二十余名、合計三十余名は討死し、其他負傷者は算するに違あらず。殊に舌間は身に六個所の重瘡を負ひ、敵の寄せ迫るや、短刀もてその咽喉を剔りて死せり。又小隊長久世芳麿は身体疲弊、歩行する能はず。隊士に担がれ、路傍に在りしが、味方の敗れしを見て、是又その場に自殺す。村上彦十は身に重瘡を負ひて敢果なく捕獲せらる。

又林辰巳、能美重固、石川辺等は戦場に於て何れも負傷し、一時其場を引上かりしが、数名の追手に逐はれ、横隈村の近傍三沢村まで追付られ、既に生擒せられんとするの一刹那、畦畔に臥し居たる林辰巳は行年恰も二十三才。勇壮活発の人物なりしも、哀れ負傷して自殺することだに能はざりしかば、傍に在る能美重固を顧み、手やら目やらして自己の首を刎られんことを望む。

○後軍の一累、秋月城の奮戦。勢竭きて、隊長越知彦四郎、訣訣して解散を命じ、豊後路指して脱走す
却説も、後軍の一累即ち越知彦四郎を始め、加藤堅武、久光忍太郎、船越開道、八木和一等隊士七十余名は、牒合の如く田代宿を發し、東北松崎宿裏手を迂回して、本道筋なる阿弥陀ヶ峰に出でんとて進行せし途次、延元の昔、菊池と少式が古戦場なる大原近辺まで進行せしに、四三島の方位に方り、砲声頻りに聞ゆ。察するに彼地方へ向ひたる前鋒隊が、途次にて巡查隊と交戦せしならんと想像しつ、石櫃の本道に出しに、恰も官軍の弾薬縦列に遭遇す。その護衛には曹長一名、巡查七名付添ひ居たり。而して、件の巡查は此回小倉士族より新募せられしものなりしが、巡查は我々隊を迎へ叩頭して説らく。我々は官兵にはあらず。実は貴隊に志を通じて官軍を扶撃せんとは思へ共、募集せられて、此任に従ひしも、素より本旨にあらざれば、此上今より貴隊に加入して一方の用を為すべしと佞言す。依つて越知は衆を制してその暴行を戒め、曹長一名と巡查連をも捕縛し、数個の弾薬を分捕りて後軍に従しめたり。



舌間慎吾らの一隊が政府軍の攻撃を受けて壊滅した戦場跡(小郡市乙隈地区)。田んぼが広がるのどかな風景からは修羅場と化したことなど想像もできない。宝満川の土手のそばに同市教育委員会、郷土史研究会の「彼岸土居古戦場」の案内板が立っている。

第十二回